

## 森林学の魅力—学際性と応用性—

溝上 展也

(みぞうえ のぶや、九州大学大学院農学研究院)

20年以上前のことになるが、“林学科”で学んでいたころのフィールド実習をよく覚えている。多種多様なメニューのなかで、植付けや間伐、樹種同定などの内容はある程度予想していたが、林道や砂防ダム設計、そして、林家にお邪魔して聞き取り調査をすることまでは想像していなかった。宮崎県椎葉の奥山の、そして北海道足寄の大空のフィールドを経験することで、森林や地域の多様性を自然と意識するようになった。加えて、演習林の教職員や地元作業員の方々とも密に交流することができ、キャンパス内では得ることのできない社会性も感じることができた。林学の多くの専門分野にわたる(マルチディシプリナリな)知識や技術を効果的に体得できるメニューであった。しかしながら、異なる分野間の関連性やそれらの総合化、すなわち、学際的(インターディシプリナリな)側面を学生時代に意識した記憶は少ない。

“森林科学講座”の教員になったころ、某林業会社のフォレスターから、「小面積伐採を導入したいが伐採面積をどの程度にすればよいか」と尋ねられた。即答することができず、それまでの自分自身の研究と森林管理の現場とのギャップを痛感した。以前はあまり関心をもたなかった生産性・経済性の視点や、これらと植栽木の成長や生物多様性をも考慮にいれた総合的な視点の必要性を強く感じた。最近、林野庁の准フォレスター研修に参加する機会を得た。路網と作業システム、育林・伐採計画、ゾーニングなど、実に幅広いメニューが組み立てられており、唯一無二の現場での具体的な意思決定が求められる。自然科学から社会科学の要素までを統合する学際的思考が求められるフォレスターにとって、今の森林学がどれほど貢献しているのかが気になってきた。学際的な研究教育の必要性はいろいろとところでいわれているが、森林学においては他学科や他学部の門戸を叩くまでもなく、まずは隣の研究室との協働を開始することで、マルチディシプリナリからインターディシプリナリへと無理なく向かうことができると思う。

最近、東南アジアからの留学生と行動をとにもする

機会が増えてきた。人々の暮らしと森林とのつながりがより密接な世界にふれることができ、“社会—生態システム”としての森林の持続性に興味を持つようになった。アジア

の森林問題や農村開発に関心のある大学院生のS君は面白い論文を見つけるといつもメールに添付して教えてくれる。Nature、ScienceやPNASといった一流といわれる学術誌からの記事も多い。その中で“社会—生態システム”に関する一連の論文がノーベル経済学賞受賞者(オストロム教授)らによるものであることを後になって知って驚いた。国内外の森林・林業の現場、あるいは、国際的議論が活発化している地球温暖化防止や生物多様性保全の現場だけでなく、アカデミズムの一流の現場においても持続可能な森林管理が注目されているようである。

“サステナビリティ学”が国内外を問わず台頭してきている。「国際社会が抱える喫緊の課題を解決し、地球社会を持続可能なものへと導く地球持続のためのビジョンを構築するために、その基礎となる新しい超学的な学術」と定義されている。東日本大震災以降、益々サステナビリティの視点が重要視されてくるだろう。林学は、100年以上も前から“保続”の原則を掲げてきたが、その伝統に胡坐をかいていても発展は望めないだろう。新しい衣装を身にまとい、国内外の様々な舞台にもっと積極的に出ていく必要がある。“社会—生態システム”としての森林・林業の持続性を学際的に探究する森林学の活躍の舞台は限りなく広いと思っている。

(専門：森林計画学)



带状択伐林での集材工程調査(2007年10月、宮崎県青井岳国有林にて)